

## 連載：研究者になる！－第67回－

東南アジア地域研究研究所  
社会共生研究部門・准教授 帯谷 知可

### ●研究者につづく道でもあったシルクロード

幼い頃の自分が、大人になって研究者になっていると知ったら、きっと驚くでしょう。なにしろ小学生時代は水泳やマーチングバンド、ポートボールなどのクラブ活動をして、常に動きまわっている子どもだったので。中高生の時もテニスに打ち込んでいたので、研究の道に進むとは思っていませんでした。ただ、小学校低学年から英語教室に通いはじめたことがきっかけで外国語に興味があわき、通訳など海外と関わる仕事に就きたいと思っていました。

多感な高校時代、井上靖の西域小説などをよく読み、シルクロードに憧れました。初めてNHK特集のカメラが敦煌などの遺跡に入った時期とも重なりました。そして外国語大学に進学し、ロシア語を専攻。最初はスペイン語を選択するつもりでしたが、実はやむなくロシア語になってしまったのです。今の専門からするとこの選択が重要な分かれ道でした。

ロシア語を専攻する学生のなかには、ロシア文学を愛読している人や社会主義思想に興味をもっている人もいました。私はほとんど事前の知識なく勉強を始めましたが、ロシア語の美しい響きに惹かれました。そんな時に授業でプラトーフの小説『粘土砂漠』が取り上げられ、ソ連の中の中央アジアに関心をもちました。ロシア革命後に中央アジアで起こった反ソヴィエト運動「バスマチ運動」を卒論のテーマにしました。

### ●ソ連解体後の激動の時代にキャリアも動きだす

もっと深く中央アジアのことを学びたいと思い、1年間の研究生時代を経て大学院へ。この時期にイスラーム世界からの視点で中央アジアを考えるアプローチや、中央アジアの言語で書かれた史料を使った近現代史研究といった新しい動きがでてきたことに刺激を受け、本格的に中央アジア近現代史研究を志すことになりました。ソ連解体という激動の時代を目の当たりにしたことも大きな影響を受けました。ソ連解体後、ロシア以外の旧ソ連地域に関心が集まり、まだキャリアもないのに事典項目執筆などの仕事をさせていただくようになり、その後ウズベキスタンに日本大使館ができると、専門調査員として勤務することになりました。当初は政治経済情勢分析の辞令をもらいましたが、当時の大使から文化広報担当に任命され、試行錯誤しながら日本文化紹介事業の運営などを行いました。この時に築いたネットワークが今の研究活動にも役立っています。

任期を終えて日本に戻ってからは、国立民族学博物館地域研究企



画交流センター（当時）で、グローバルな課題についての共同研究のオーガナイズなどを担当しました。こうした経験を積むなかで、ウズベキスタンが独立後の国づくりの過程で直面している課題と、ロシア革命後の中央アジアの社会主義的近代化の歴史が重なり、現在の研究スタイルができてきました。

### ●研究者も生活者であることを大切に

現在は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国のモダニティの形成過程に関心があります。特に近年は、女性がまとうイスラーム・ヴェールを題材にして、中央アジアにおける女性解放運動の歴史、イスラーム復興と女性、現代のジェンダーの問題などについて調べています。その他にも、ロシア帝政期にロシア人によって編纂された『トルキスタン集成』という希少史料のデータベース化に携わってきました。研究の醍醐味は、断片的な情報や事柄をつなげていき、点から線になることで、何かしらの意味が浮かび上がった時のわくわくするような感覚や大きな達成感にあります。また学生に中央アジアについて話し、自分の興味に引き付けて関心をもってもらえた時も嬉しいです。

女性研究者にとって仕事と家庭の両立は大きな課題です。私も『トルキスタン集成』のデータベース化に取り組みはじめた頃に高齢出産と、ほぼ一人での育児を経験することになり、最も育児が大変な時期は、フィールドで飛び回るよりは子どものそばで、と切り替えました。職場の温かい雰囲気や育児経験者のサポートのおかげで、研究活動を続けることができました。現在は当研究所の男女共同参画推進委員会に参加して、小さな子どもをもつ教職員が無理なく働ける環境づくりに努めるとともに、男女共同参画のための広報活動にも取り組んでいます。育児支援も年々拡充されてきているので、研究と家庭の両立は確かにとても大変ですが、大変な分、豊かでもあるので、恐れずチャレンジしてほしいです。「研究者も生活者であることを大切に」というある先輩女性研究者の言葉を私も大事にしたいと思っています。

### 編集後記

台風の忘れ物

今年は台風の直撃もあり、ついに臨時休園となりました。利用者の皆様にはご迷惑をおかけしました。

通勤途上の道にも台風の忘れ物が。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町  
電話 075 (753) 2437  
FAX 075 (753) 2436  
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp  
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>